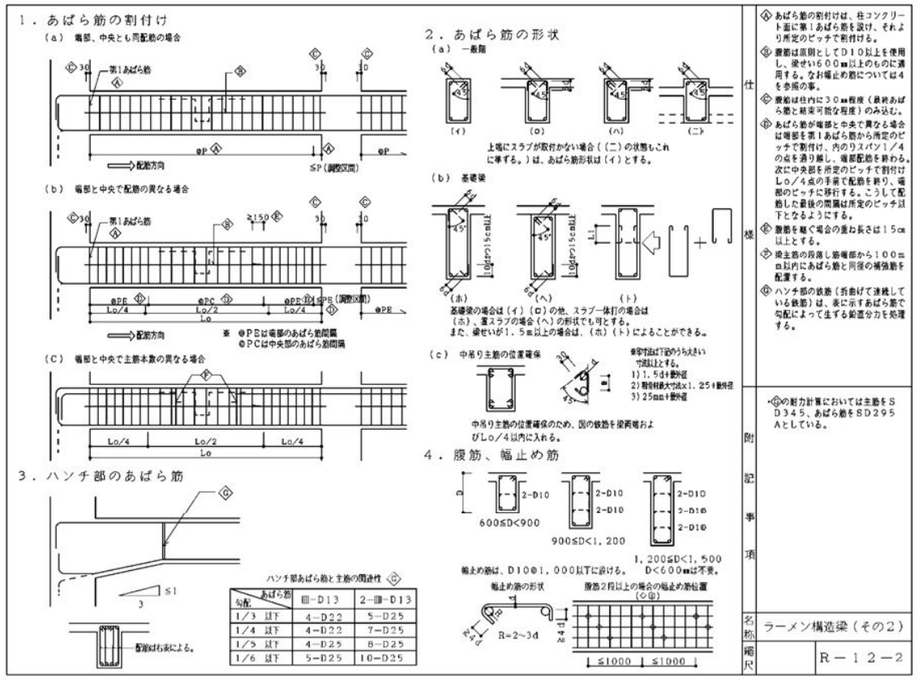


仕様

Ⓐ あばら筋の割付は、柱コンクリート面に第1あばら筋を設け、それより所定のピッチで割付ける。

Ⓑ 腹筋は原則として D10以上を使用し、梁せい600mm以上のものに適用する。なお幅止め筋については4を参照の事。

Ⓒ 腹筋は柱内に30mm程度（最終あばら筋と結束可能な程度）のみ込む。

Ⓓ あばら筋が端部と中央で異なる場合は端部を第1あばら筋から所定のピッチで割付け、内のリスパント／4の長さ迄り離し、端部配筋を終わる。次に中央部を所定のピッチで割付けLo／4点の手前で配筋を終り、端部のピッチに移行する。こうして配筋した最後の間隔は所定のピッチ以下となるようにする。

Ⓔ 腹筋を継ぐ場合の重ね長さは15cm以上とする。

Ⓕ 梁主筋の段落し筋端部から100mm以内にあばら筋と同径の補強筋を配置する。

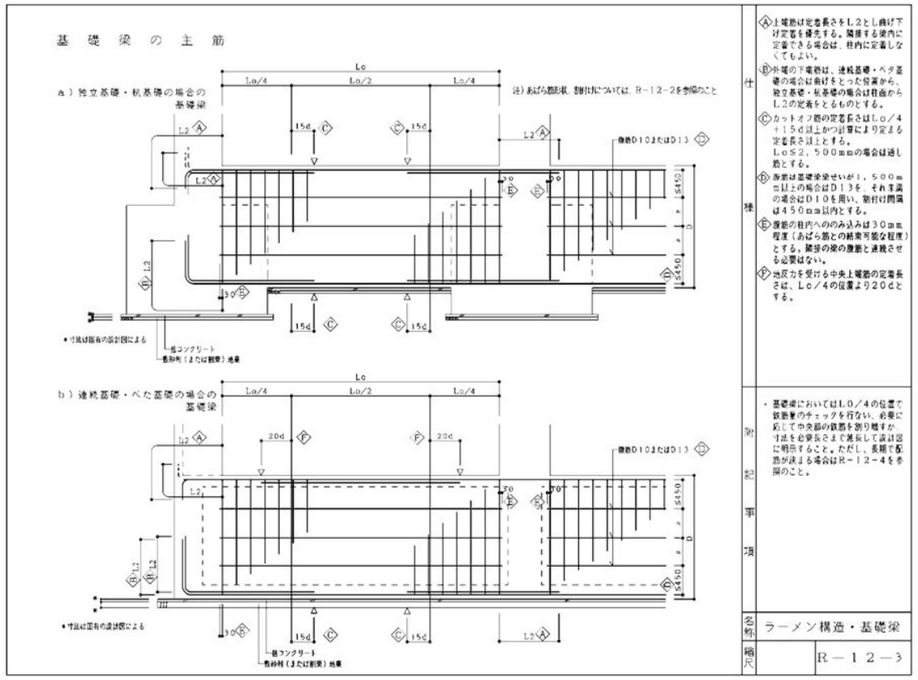
Ⓖ ハンチ部の鉄筋（折曲げて連続している鉄筋）は、表に示すあばら筋で勾配によって生ずる鉛直分力を処理する。

附記事項

◇印の耐力計算においては主筋をSD345、あばら筋をSD295Aとしている。

名称 ラーメン構造梁（その2）

縮尺 R－12－2



仕様

Ⓐ 上端筋は定着長さをL2とし曲げ下げ定着を優先する。隣接する梁内に定着できる場合は、柱内に定着しなくてもよい。

Ⓑ 外端の下端筋は、連続基礎・ベタ基礎の場合は曲げをとった位置から、独立基礎・杭基礎の場合は柱面から L2の定着をとるものとする。

Ⓒ カットオフ筋の定着長さはLo／4＋15d以上かつ計算により要る定着長さ以上とする。
Lo≦2,500mmの場合は通し筋とする。

Ⓓ 腹筋は基礎梁せいが1,500mm以上の場合はD13を、それ未満の場合はD10を用い、割付け間隔は450mm以内とする。

Ⓔ 腹筋の柱内へのみ込みは30mm程度（あばら筋との結束可能な程度）とする。隣接の梁の腹筋と連結させる必要はない。

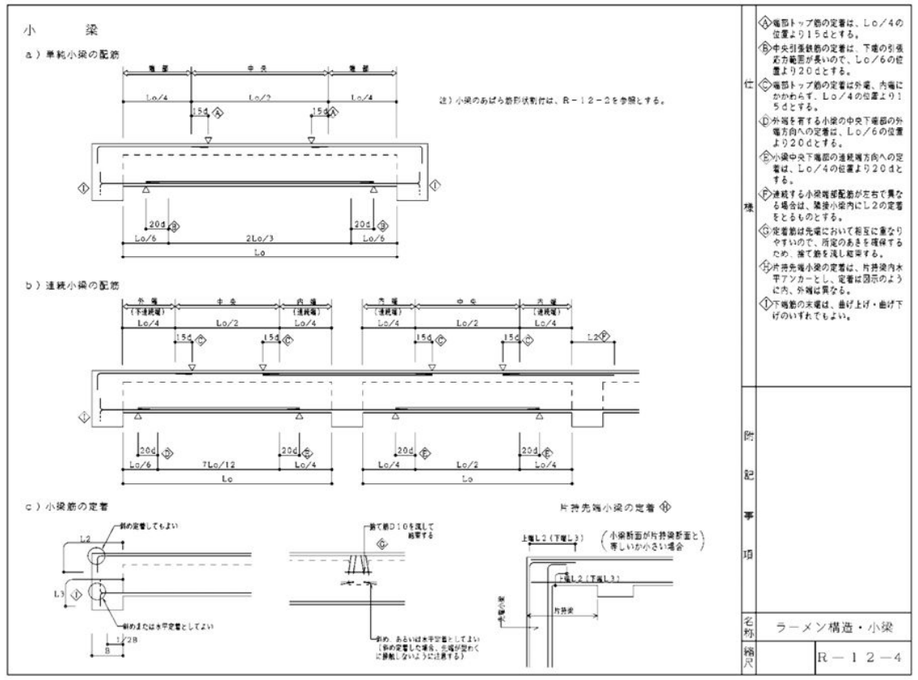
Ⓕ 地反力を受ける中央上端筋の定着長さは、Lo／4の位置より20dとする。

附記事項

・基礎梁においてはLO／4の位置で鉄筋量のチェックを行ない、必要に応じて中央部の鉄筋を割り増すか、寸法を必要長さまで延長して設計図に明示すること。ただし、長期で配筋が決まる場合はR－12－4を参照のこと。

名称 ラーメン構造・基礎梁

縮尺 R－12－3



仕様

Ⓐ 端部トップ筋の定着は、Lo／4の位置より15dとする。

Ⓑ 中央引張鉄筋の定着は、下端の引張応力範囲が長いので、Lo／6の位置より20dとする。

Ⓒ 端部トップ筋の定着は外端、内端にかかわらず、Lo／4の位置より15dとする。

Ⓓ 小端を有する小梁の中央下端部の外端方向への定着は、Lo／6の位置より20dとする。

Ⓔ 小梁中央下端部の連続端方向への定着は、Lo／4の位置より20dとする。

Ⓕ 連続する小梁端部配筋が左右で異なる場合は、隣接小梁内に L2の定着をとるものとする。

Ⓖ 定着筋は先端において相互に重なりやすいので、所定のあきを確保するため、接て筋を浅し縦寄する。

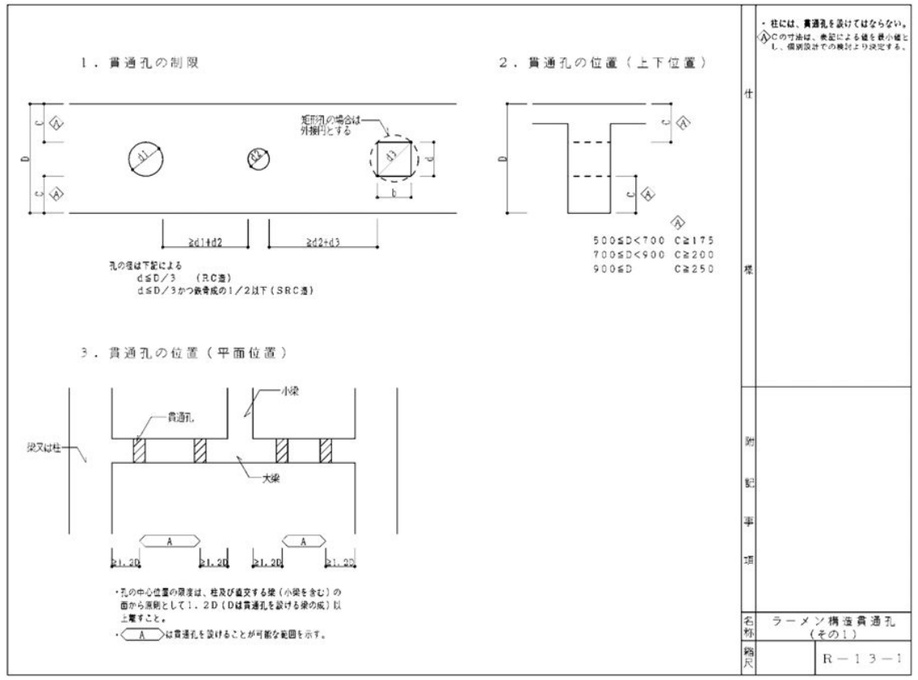
Ⓗ 片持先端小梁の定着は、片持梁内水平アンカーとし、定着は図示のように内、外端は異なる。

Ⓘ 下端筋の末端は、曲げ上げ・曲げ下げのいずれでもよい。

附記事項

名称 ラーメン構造・小梁

縮尺 R－12－4



仕様

・柱には、貫通孔を設けてはならない。

Ⓐ Cの寸法は、衝突による値を最小値とし、個別設計での検討より決定する。

附記事項

名称 ラーメン構造貫通孔（その1）

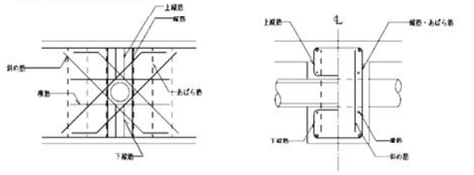
縮尺 R－13－1

株式会社 ＥＲＣデザイン 構造設計一級建築士証交付番号 第３８６０号 一級建築士登録番号 第２５６３３８号 池田 寛彦	株式会社 岩崎設計事務所	東浦住宅建築工事（第１９工区）	図面番号
	一級建築士登録 第66771号 岩崎 征一	壁式ラーメン構造標準配筋図（５） 縮尺 —	S-E
	検図 / 製図 / 設計 H25年2月	愛知県建設部建築局公営住宅課	

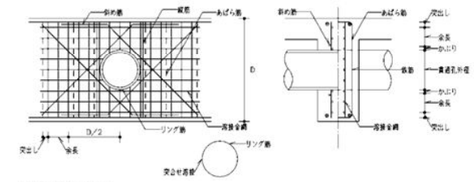
貫通孔の補強要領

1）貫通補強配筋要領

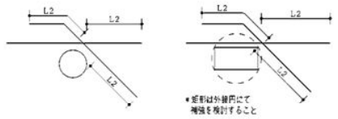
a）在来工法による補強要領



b）溶接金網を用いた補強要領



2）鉄筋の定着長さ



＊矩形は外接円にて補強を検討すること

仕様

・補強方法は、スリーブ補強後のせん断耐力が無孔梁の同等以上の耐力を有するものとする。

・縦筋・斜筋を溶接金網に変更することも可とする。その際は縦筋、横筋に等価な断面積をもつ溶接金網を選定すること。

・縦筋および上下縦筋は、あばら筋の外に配筋する。

・補強筋は、主筋の内側とする。やむを得ない場合は、監督員の承諾を受けて外側とすることができる。

・既製品による補強を行う場合、既製品補強材には、実験により性能が確認され、（財）日本建築センターの評定・評価を受けたものを用いる。

附記事項

・使用材料は、別有の設計図による。

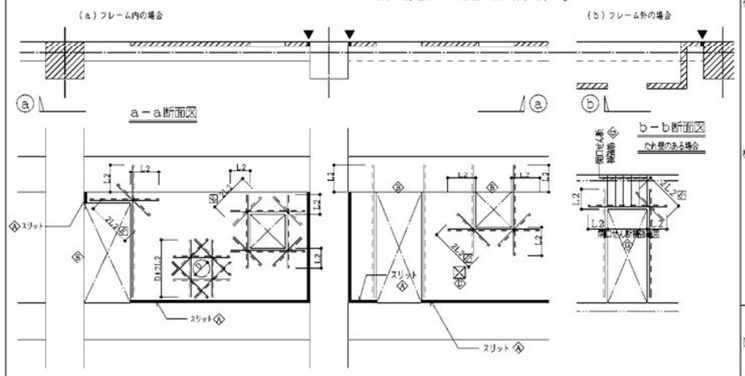
・（財）日本建築センターの評定・評価を受けた製品とは、1995年6月号のビルディングレターに記載された「はり貫通孔補強材の評定・評価基準」にて評定・評価を受けた製品とする。

名称　ラーメン構造梁の貫通孔（その2）

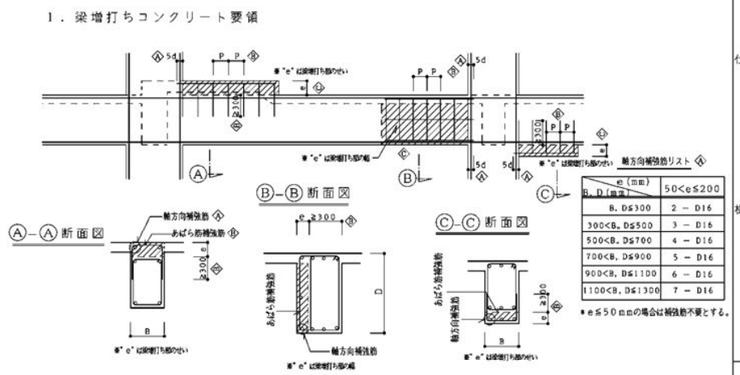
縮尺　R－13－2

4）非耐力壁開口補強，スリット詳細

注）開口部補強筋は全てD13を示し　- - -表示の補強筋はW120以上の場合に使用する。Ⓔ


(a)フレーム内の場合
(b)フレーム外の場合
a－a断面図
b－b断面図
ひび割れある場合
スリット㋐
スリット㋐
スリット㋐
L1
L2
D13
D10/2
D10/2
D13
D13
D10/2
D10/2
D13
D13
D10/2
D10/2
D13

1．梁増打ちコンクリート要領



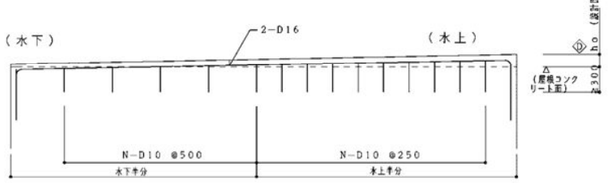
軸方向補強筋リスト Ⓐ

e (mm) / B, D (mm)	50<e≦200
B, D≦300	2 － D16
300<B, D≦500	3 － D16
500<B, D≦700	4 － D16
700<B, D≦900	5 － D16
900<B, D≦1100	6 － D16
1100<B, D≦1300	7 － D16

*e≦50mmの場合は補強筋不要とする。

2．はり間方向屋根梁水勾配増打部の補強要領

はり間方向屋根の水勾配増打部の補強は下記に依る。



仕様

Ⓐ軸方向補強筋は増打ちコンクリート断面積の0．4％以上かつD16以上、間隔は200mm以下とする。定着は5dとする。補強筋を表にて示す。5d以上の定着をとる場合の補強筋については構造設計により決定する。

Ⓑあばら補強筋はD10以上の鉄筋を使用し、ピッチはあばら筋と同ピッチとする。また実断面への定着は300mm以上とする。

Ⓒ梁の増打ちコンクリートの厚さeは200mm以下とする。

Ⓓ t≦150の場合には、補強筋ワーD10@250をさらに水下半分の1/2まで延長して配筋する。

附記事項

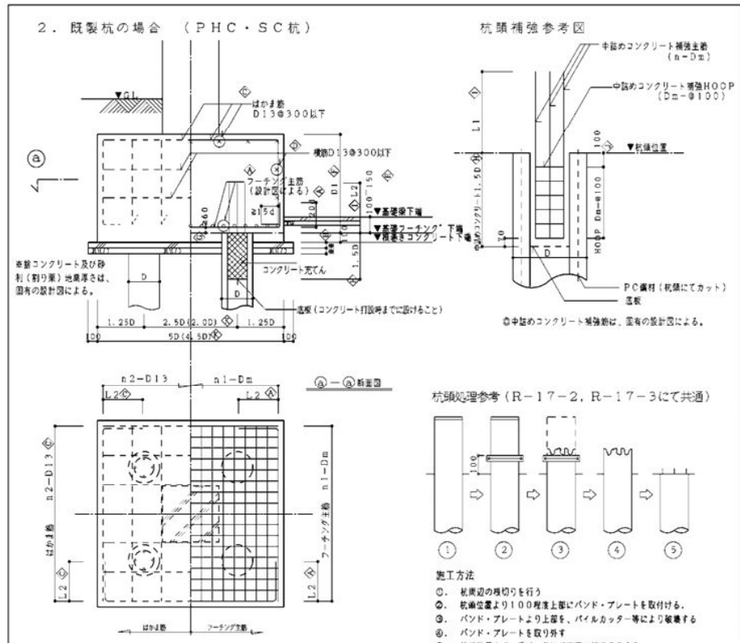
・梁の増打ちコンクリートの厚さeが梁全長にわたり200mmをこえる場合これを正規の断面と考え、正規の計算にとり入れるものとする。

・5d以上の定着をとる場合の補強筋については構造設計により決定する。

名称 ラーメン構造 梁増打ち要領

縮尺 R－16－1

2．既製杭の場合 （PHC・SC杭）



仕様

Ⓐフーチング主筋本数は設計図による。因隣鉄筋は一方を水平にL2定着し他の一本を立上げる。

Ⓑ捨張きコンクリートの厚さは100mmとする。

Ⓒはかま筋は特記なき限りD13@300以下とし、末端部の余長は15d以上とし主筋とラップさせる。なお因隣部の鉄筋の納まりは主筋と同程とする。

Ⓓはかま筋、横筋もD13@300以下とする。

Ⓔ基礎梁下端と基礎フーチング下端はフーチングの配筋と基礎梁下端の鉄筋が重なるのを避けるため、100～150mmのあきをとる。

Ⓕフーチングの厚さD1は、構造計算により決定する。

Ⓖフーチング主筋は、杭端からスペーサー等により50mm以上のかぶりを確保する。

Ⓗ中詰めのコンクリートは、杭頭位置より杭径の1．5倍の範囲まで、十分に充填すること。

Ⓘ中詰めコンクリート補強主筋は、杭頭位置より L1の定着を行うこと。

Ⓙ中詰めコンクリート補強HOOP筋は、杭頭位置より100mm下った位置より新付を行うこと。

Ⓚ（ ）内数値は埋込み杭の場合を示す。

附記事項

・中詰めコンクリートは、基礎のコンクリートの調合と同じ調合のコンクリートを使用すること。

・既製杭の基礎形式は、R－17－2及びR－17－3の2タイプあるので、どちらを使用するかは固有の設計図による。

・杭の引き抜きに対しての杭頭接合部の計算を行う。

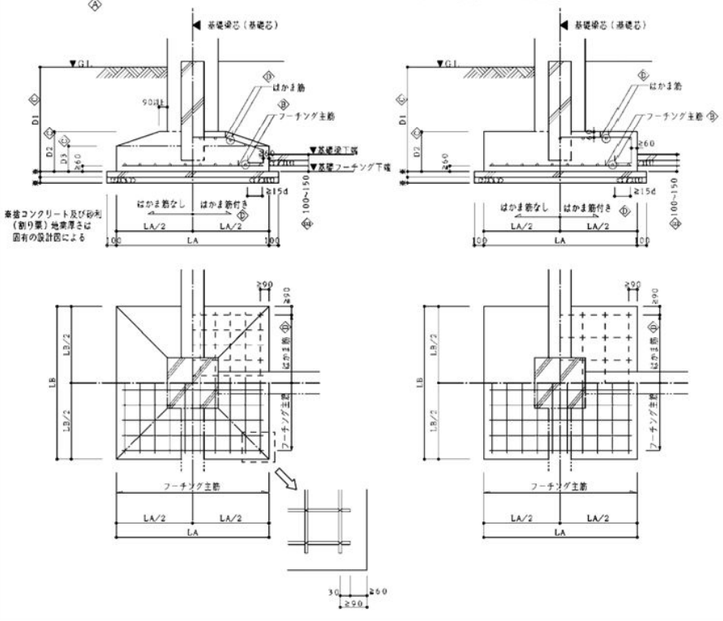
・杭頭接合部の固定度（α）は、十分注意して設計する。

名称 ラーメン構造基礎（その2）

縮尺 R－17－2

1．直接基礎の場合

（a）台形断面基礎　　（b）長方形断面基礎



仕様

Ⓐ2m×2m以下の独立基礎においては、施工上の容易さを考え台形断面としない。なお、これ以上の大きな基礎で台形断面とした場合は、テーパー部を壁わくの必要のない勾配（15°～20°）以下とする。

Ⓑフーチング主筋は、本数は設計図による。フーチング端部において60mm以上のかぶりをとる。端部のフーチング主筋1本目は、90mm以上のかぶりをとって配筋する。

Ⓒ D1，D2，D3は、固有の設計図による。

Ⓓはかま筋は基礎に浮上り力が作用する場合は必ず配筋し、鉄筋径、ピッチは固有の設計図による。

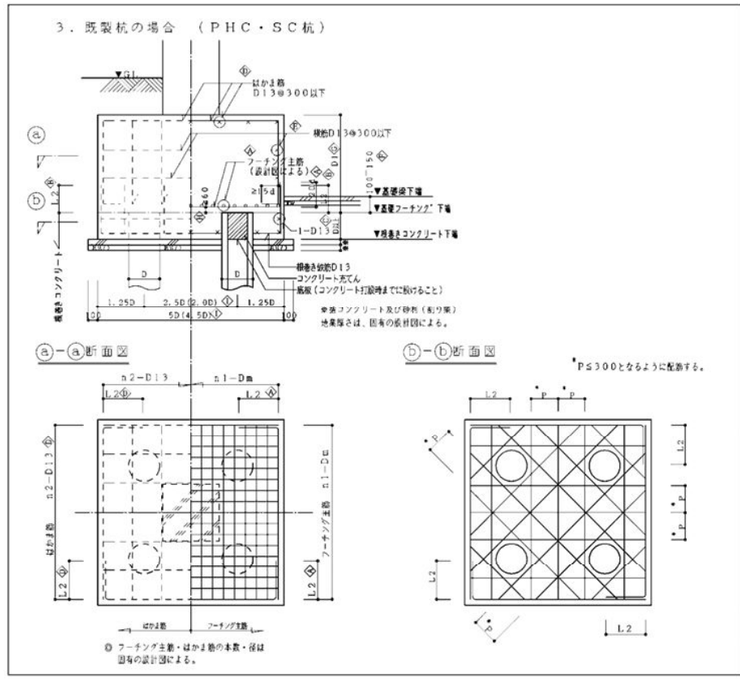
Ⓔ基礎梁下端と基礎フーチング下端は、基礎梁下端筋とフーチング主筋が重なるのを避けるため、100～150mmのあきをとる。

附記事項

名称 ラーメン構造基礎（その1）

縮尺 R－17－1

3．既製杭の場合 （PHC・SC杭）



仕様

Ⓐフーチング主筋本数は設計図による。フーチング端部において20d上方にたちあげるものとする。因隣鉄筋は一方を水平にL2定着し、他の一本を立上げる。

Ⓑ捨張き鉄筋は施工としてD13を用い、縦、横、斜めに間隔300mm以下となるように配し、末端部はフーチング内にL2定着とし、捨張き鉄筋の交叉部分の鉄筋は、主筋と同様一方を水平にL2定着し、他の一本を立上げる。

Ⓒ捨張きコンクリートの厚さは杭径以上とする。

Ⓓはかま筋は、特記なき限りD13@300以下とし、末端部の余長は15d以上とし、フーチング主筋とラップさせる。なお因隣部の鉄筋の納まりは主筋と同様とする。

Ⓔはかま筋、横筋もD13@300以下とする。

Ⓕ基礎梁下端と基礎フーチング下端は、フーチング主筋と基礎梁下端の鉄筋が重なるのを避けるため、100～150mmのあきをとる。

Ⓖフーチングの厚さD1は、構造計算により決定する。

Ⓗフーチングの主筋は杭端からスペーサー等により60mm以上のかぶりを確保する。

Ⓘ（ ）内数値は埋込み杭の場合を示す。

附記事項

・中詰めのコンクリートは、基礎のコンクリートの調合と、同じ調合のコンクリートを使用すること。

・杭の引き抜きに対しての杭頭接合部の計算を行う。

・杭頭接合部の固定度（α）は、十分注意して設計する。

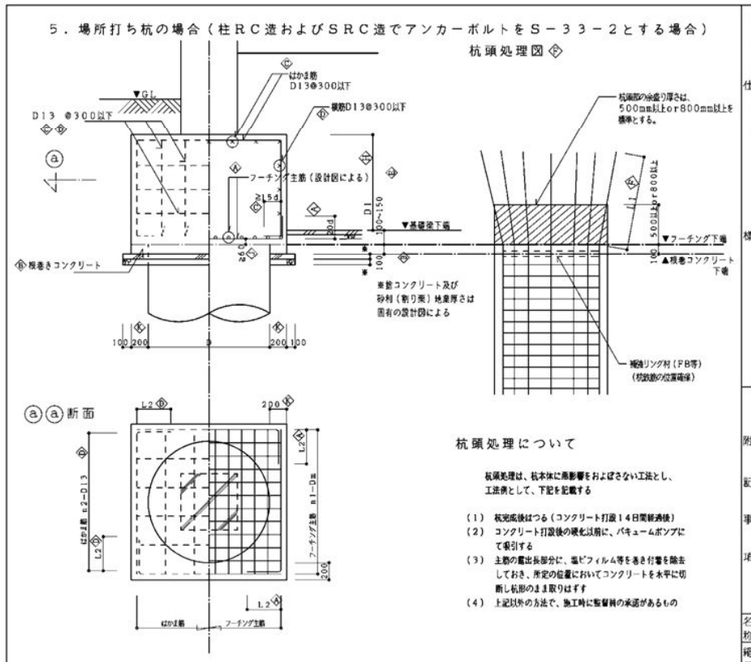
名称 ラーメン構造基礎（その3）

縮尺 R－17－3

株式会社 ＥＲＣデザイン	株式会社 岩崎設計事務所	東浦住宅建築工事（第１９工区）	図面番号
構造設計一級建築士証交付番号 第３８６０号	一級建築士登録 第66771号 岩崎 征一	壁式ラーメン構造標準配筋図（７） 縮尺 —	S-G
一級建築士登録番号 第２５６３３８号 池田 寛彦	検図 / 製図 / 設計 H25年2月	愛知県建設部建築局公営住宅課	

5．場所打ち杭の場合（柱ＲＣ造およびＳＲＣ造でアンカーボルトをＳ－３３－２とする場合）

杭頭処理図 Ⓚ



仕様

Ⓐ隅角部の鉄筋は一方を水平にＬ２定着し他方を立上げるよう配筋する。

Ⓑ根巻きコンクリートの厚さは１００mmを標準とする。

Ⓒはかま筋はD13@300以下とし、フーチング下端まで下げ、末端部の余長を１５dとし主筋とクラップさせる。

Ⓓはかま筋、横筋はD13@300以下とする。

Ⓔフーチング下端と基礎梁下端のあきは、１００～１５０mmとし、フーチング鉄筋と基礎梁主筋の重なりをさける。

Ⓕ杭頭部の余盛り厚さは杭施工時の孔中に水が多い場合は８００mm以上とし、孔中に水の少ない場合は５００mmを標準とする。また柱主筋はフーチング内にＬ１以上定着すること。

Ⓖフーチングの厚さＤ１は構造計算により設定する。

Ⓗフーチング主筋は杭頭からスペーサー等により６０mm以上のかぶりを確保する。

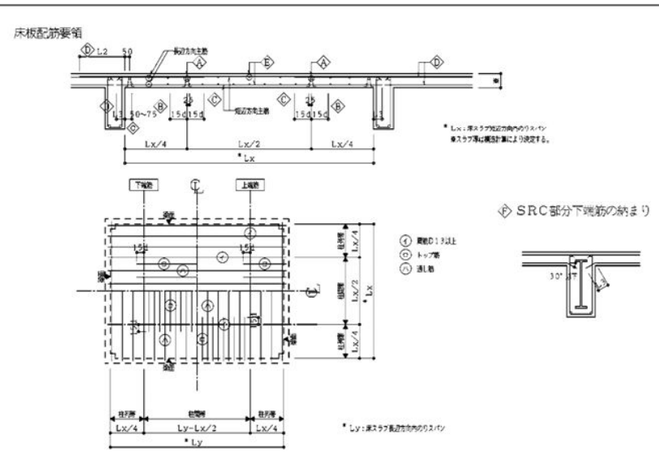
Ⓘ杭のフーチングからのへりあきは、２００mmを標準とする。なお、杭が２本打ち以上となる場合のフーチングは長方形とする。この時の杭芯間隔は２Ｄ以上とする。

附記事項

名称：ラーメン構造基礎（その５）

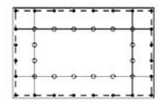
縮尺：Ｒ－１７－５

床板配筋要領



Ⓓ SRC部分下端筋の納まり

床板スペーサー配置要領



＊ ○ プラスチックスペーサー または鋼製スペーサー

―― 肩筋（D13以上）

- - - 床等部配筋

［1］住戸部分床板の上筋スペーサー

住戸部分床板の上筋には、プラスチックスペーサーまたは鋼製スペーサー（いずれも鉄筋ずれ止めの工夫のあるもの）を肩筋の位置（○印にて示す）に750mm以下の間隔で設置し、床端部配筋の位置（・印にて示す）に600mm以下の間隔で設置する。ただし、短辺方向の長さが３m以下の場合には、床端部配筋の位置のスペーサーの間隔を750mm以下とすることができる。

［2］住戸部分床板の下筋スペーサー

住戸部分床板の下筋には、プラスチックスペーサー（下筋用爪付き）または鋼製スペーサー（鉄筋ずれ止めの工夫のあるもの）を床板１㎡当り２個程度の割合で有効に設置する。

仕様

Ⓐ肩筋はD１３以上とする。この位置のスペーサーは、床板スペーサー配置要領により配筋する。

Ⓑ主筋のトップ筋はＬｘ／４（長辺方向もＬｘ／４）より１５d延長する。

Ⓒサポート部分の下端筋は、バーサポート等に当たらないように２５mm程度ずらして配筋する。

Ⓓ上端筋の定着はＬ２とし、隣接スラブに定着する。連続する場合は通しとしてよい。柱間帯上端筋は梁中には継手を設けないことが望ましい。下端筋の定着はＬ３とし、隣接スラブに定着し、連続する場合は上端筋と同様な処理としてよい。

Ⓔ住戸間帯中央上端筋は特殊上端筋を１本おきに通す。

Ⓕ ＳＲＣの場合のスラブ下端筋は、鉄骨にぶつかる場合または梁の主筋にぶつかる場合については３０°を超えない範囲で梁面から折曲げてよい。

附記事項

住宅工法スラブの場合に於いては下記による

・スラブ厚さは、構造設計による。

・住戸の居住性能及び施工精度を上げるために、スラブ厚さは１５０mm以上とすることが望ましい。

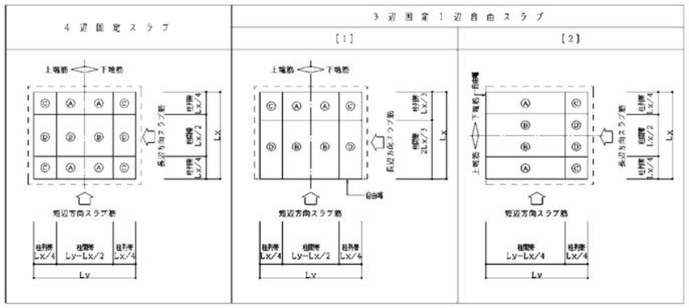
・スラブの内の９面積は、長期たわみ、ひび割れ及び振動障害防止のため２４㎡以下とすることが望ましい。

・内の９面積が２４㎡を超える場合には、Ｒ－５１－５の補強配筋を行う。

名称：床板（その２）

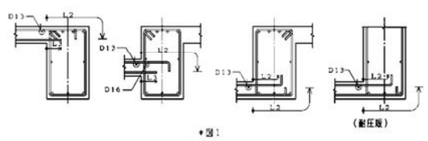
縮尺：Ｒ－５１－２

床スラブ配筋基準



No	記号	位置	短辺方向 柱間帯 端部 Ⓐ	短辺方向 柱間帯 中央 Ⓑ	短辺方向 柱列帯 端部、中央 ⓒⓓ	長辺方向 柱間帯 端部 Ⓓ	長辺方向 柱間帯 中央 Ⓑ	長辺方向 柱列帯 端部、中央 ⓒⒶ	備考
		上端筋		Ⓐ	Ⓓ		Ⓐ	Ⓓ	
		下端筋			Ⓓ			Ⓓ	

a．継手長さ……L１（引張り応力を受ける箇所） L２（圧縮応力を受ける箇所）
b．定着長さ……（上端筋……L２ 下端筋……L３） 要領は＊図１による。



＊図１

仕様

Ⓐ中央部上端（ⓐ部分）は、端部上端筋を１本おきに通すことを標準とする。

Ⓑ柱列帯の配筋は、柱間帯の配筋の１／２（断面積比）かつ下表の値以上とする。

柱間帯端部上端筋	柱列帯上下筋
D10 @ 150	D10 @ 250
D10 @ 200	D10 @ 250
D10 @ 250	D10 @ 250
D10 @ 300	D10 @ 250
D10 D13@ 150	D10 @ 200
D10 D13@ 200	D10 @ 250
D10 D13@ 250	D10 @ 250
D10 D13@ 300	D10 @ 250

D１３のみのときは上表のD１０をD１３と読みかえて適用する。

附記事項

・３辺固定１辺自由スラブ［１］において$L_y/L_x \geq 2$なる場合は、片持スラブに準じて取り扱う。

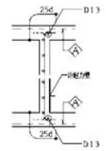
・３辺固定１辺自由スラブ［１］、［２］の場合は、セチアミ配筋とする。

名称：床板（その１）

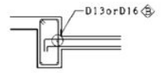
縮尺：Ｒ－５１－１

１．壁受部分のスラブ補強

スラブに隣に壁が取り付く場合は、壁筋を両側へ交互にアンカーする。（定着長25d）

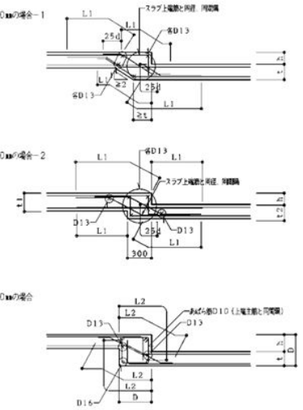


２．スラブ受け筋



梁中間にスラブが取り付くときはスラブ上端筋の受け筋を入れる。

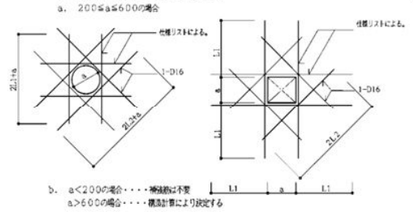
３．スラブ段差部配筋要領



４．スラブ開口部補強

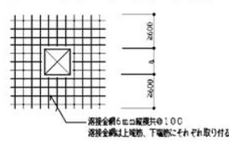
＊ 鉄筋は、スラブ上端筋・下端筋の内側に配筋する。

a．200≦a≦600の場合



b．a＜200の場合・・・・補強筋は不要
a＞600の場合・・・・構造計算により設定する

・メッシュによるスラブ開口部補強



仕様

・スラブ筋が開口部にあたるときは、原則として、主筋位置をずらし、通に通す。

・スラブ筋が開口部により切断する場合には下表の補強を開口部周囲より、左下図の範囲内に配置する。この場合、補強筋の両端は、必ず梁筋に定着させる。

a	補強筋
200≦a＜400	2-Dn
400≦a≦600	3-Dn

（補強筋本数は上・下筋総数を示す。n：切断されるスラブ筋の最大径）
上記の他メッシュ筋による補強も可。

・スラブ厚さが$h > 150$mmとなる場合については、出来れば小梁を設けて処理を行う。それが不可能な場合のみ、本図によって処理をしてもよい。

Ⓐ最上部スラブは壁による支持のため、上端に固定モーメントが生じる可能性があり、壁下部スラブ荷重の重量により下端に付加曲げモーメントが生じる。この様なモーメントに対する補強筋があるのでは意味する。

Ⓑ受け筋は、スラブ上端筋がD１０の場合はD１３、D１０D１３又はD１３の場合はD１６とする。

附記事項

名称：床　板（その３）

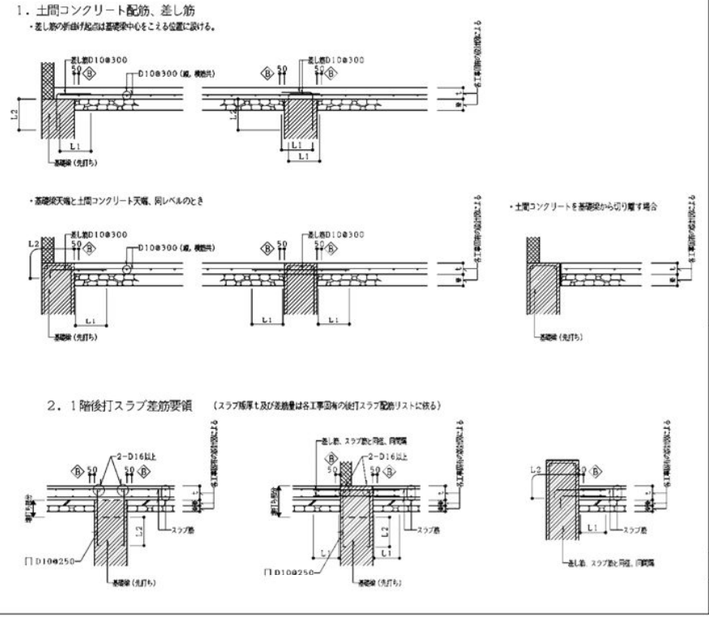
縮尺：Ｒ－５１－３

株式会社　ＥＲＣデザイン 構造設計一級建築士証交付番号 第３８６０号 一級建築士登録番号 第２５６３３８号　池田　寛彦	株式会社　岩崎設計事務所	東浦住宅建築工事（第１９工区）	図面番号
	一級建築士登録　第66771号 岩崎　征一	壁式ラーメン構造標準配筋図（８） 縮尺 —	S-H
	検図 / 製図 / 設計 H25年2月	愛知県建設部建築局公営住宅課	

◎1階スラブ（土間コンクリートスラブ，後打ちスラブ）差し筋要領

1．土間コンクリート配筋、差し筋

・差し筋の折曲げ配筋は基礎梁中心をこえる位置に設ける。



Ⓐ土間コンクリート天端と基礎梁天端が同レベルとなると、差し筋が型わくを貫通することになるので、可能な限り置きスラブとする。

Ⓑスラブ筋の効めの長さは、梁筋より50㎜の位置に配するものとする。

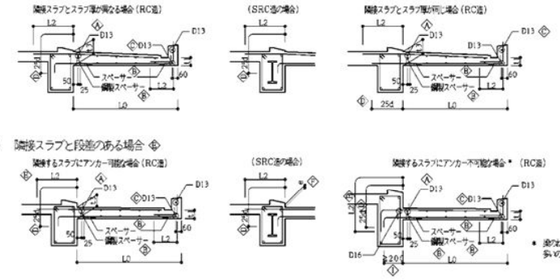
・土間コンクリートは、居室床には使用しない。

名称　床　板（その４）

縮尺　R－５１－４

片持スラブ配筋要領

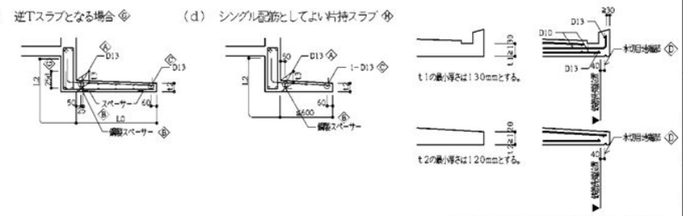
（a）隣接スラブと連続する場合



（b）隣接スラブと段差のある場合 Ⓔ

＊ 波のおじり補強をする場合が多いので注意すること。

（c）逆Tスラブとなる場合 Ⓖ　（d）シングル配筋としてよい片持スラブ Ⓗ



片持スラブの元端の厚さt3は設計図による他、下記の値以上とする。

位置	L0 (mm)	t3 (mm)
バルコニー	L0≦1000	160
廊下	1000＜L0≦1400	180
庇	600＜L0≦1300	150
	1300＜L0≦1500	180

Ⓐ受け筋はD13以上とし配力筋と兼用してもよい。

Ⓑ片持スラブ受け筋は鋼製スペーサー500㎜以内に溶接し、その位置を確保する。
片持スラブの下端筋の元端と先端にかぶりを保持するためのスペーサーを配置する。

Ⓒ先端部補強筋は1－D13以上とする。

Ⓓ先端の縦筋受筋は1－D13以上を配置する。主力下端筋は本図指定位置から40㎜の位置で止める。また、躯体分下部にはひび割れ防止のためD10を配する。

Ⓔ隣接スラブと段差のある場合も可能な限り隣接スラブにアンカーとし、不可能な場合のみ梁内アンカーとする。

Ⓕ SRC造の場合、片持スラブ上端筋がウェブに当たらないよう"e"の寸法を決定すること。

Ⓖ逆Tスラブの場合のあいた端部アンカーは折曲げ位置より25dとする。

Ⓗ片持長さ600㎜以下ものは、シングル配筋としてよい。

Ⓘ片持スラブ筋の折曲位置は中心を超えかつ200㎜以上とする。

・片持スラブの出寸法（L0）は、梁面からとする。また、L0が大きい場合、片持ちスラブの先端に集中荷重が作用する場合は、片持梁にて補強を行う。

・片持スラブ厚さ、寸法、配筋は図面の設計図による。

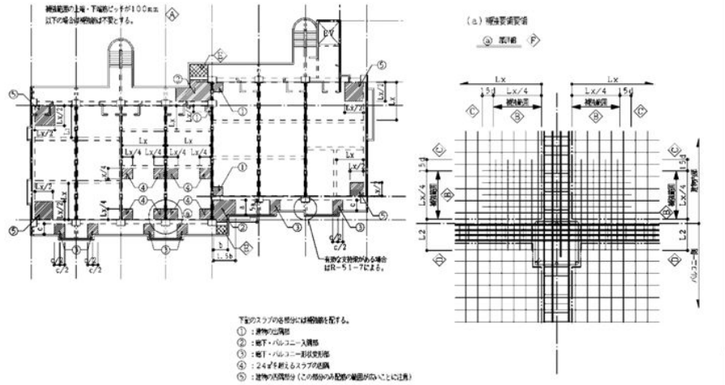
・本配筋設計図は、"ラーメン構造"及び"壁式構造"で共通に使用するものとする。

名称　片持ちスラブ配筋要領（その１）

縮尺　R－５１－６

◎スラブ出隅部・入隅部補強配筋要領

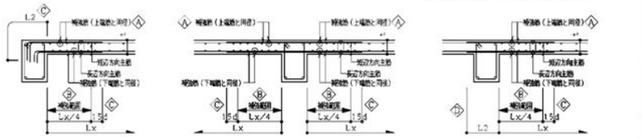
補強範囲の上端・下端ピッチが100㎜以下の場合は補強は不要とする。



下記のスラブの各部分には補強筋を配する。
① ：建物の出隅部
② ：地下・バルコニー入隅部
③ ：地下・バルコニー形状変形部
④ ：24ヶ月経過するスラブの出隅
⑤ ：建物大隅部分（この部分のA筋配筋の範囲がないことに注意）

（b）補強筋定着要領

・スラブが連続しない場合　・スラブが連続している場合　・バルコニーが取り付いている場合
＊スラブに段差のある場合も同様な定着方法とする。



Ⓐ建物の出隅・スラブの出隅・入隅部・形状変更部は、長辺方向・短辺方向共に、スラブの上・下端筋と同径の補強筋を各配筋と同レベルで追加する。ただし、設計時における配筋ピッチが100㎜以下の場合、補強は不要とする。

Ⓑ建物の出隅・スラブの出隅・入隅部・形状変更部の補強範囲内の補強筋は、上端筋・下端筋ともピッチが100㎜以下となるように配筋する。

Ⓒ補強筋の末端部はスラブ上端筋と同様の定着・余長をとる。

Ⓓバルコニーに段差がなく、隣接スラブ内に定着できる場合は、鉄筋を延長してもよい。

Ⓔバルコニー出隅部については R－51－7 を参照のこと。

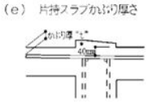
Ⓕ R－51－3に示す開口補強筋と出隅部・形状変形部の補強筋が同位置となる場合は、R－51－3の補強筋を優先して配筋を行う。

名称　床　板（その５）

縮尺　R－５１－５

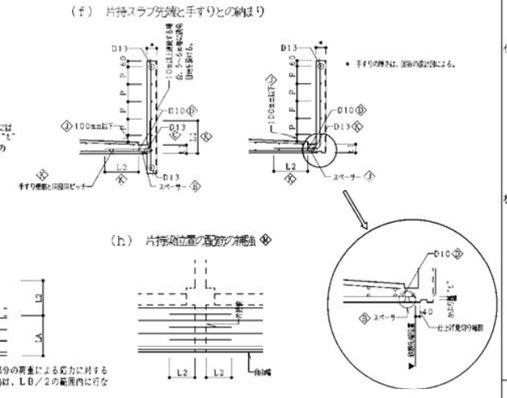
片持スラブ配筋要領

（e）片持スラブかぶり厚さ

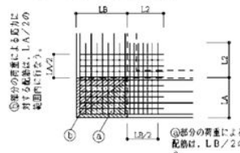


＊片持スラブ鉄筋がスラブ内アンカーされる場合、片持スラブには負荷がついているので、通常のかぶりでは定着電であり厚"t"が足りる。このため、設位置でスラブ筋（スターラップ）のかぶり厚さを40㎜とする。

（f）片持スラブ先端と手すりとの納まり



（g）片持スラブ隅角部補強 Ⓙ

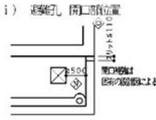


Ⓐ部分の荷重による応力に対する配筋は、LB／2の範囲内に行う。

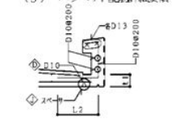
配力筋の本数を減じて隅角部応力を処理する。かつⒶ＋Ⓑ部分の荷重をLA、LB間の各々の鉄筋で担割に処理する。

（h）片持端位置の補強筋の補強 Ⓚ

（i）通線孔、開口部位置



（j）パラペット配筋詳細要領



Ⓐ～Ⓘは R－51－6 による。

Ⓑ先端手すり壁の配筋はスラブ筋の上下100㎜以内に第1鉄筋を配し割付を行う。

Ⓒ手すり壁がスラブの上部のみの場合は手すり縦筋をスラブ内に L2アンカーする。垂れ壁がある場合は手すり壁の縦筋を垂れ壁まで延長し上の補強筋を配置する。

Ⓓ片持スラブ隅角部は、斜め筋による補強は行わない。（補強筋を配すと6段配筋となるため）

Ⓔ片持梁位置には片持スラブ上端筋による補強を行う。補強筋は片持スラブ内に L2定着すること。

Ⓕ鉄筋径の関係は、手すり壁部よりち100㎜以上離して設ける。

Ⓖ手摺壁が、柱及び壁に取り付く場合は手摺壁と柱及び壁の間にスリットを設ける。ただし、スリットを設けずに手摺壁の柱及び壁に対する影響を考慮した設計を行う場合は、スリットを設けなくても良い。

・片持スラブの出寸法（L0）は、梁面からとする。また、L0が大きい場合、片持ちスラブの先端に集中荷重が作用する場合は、片持梁にて補強を行う。

・片持スラブ厚さ、寸法、配筋は図面の設計図による。

・本配筋設計図は、"ラーメン構造"及び"壁式構造"で共通に使用するものとする。

名称　片持ちスラブ配筋要領（その２）

縮尺　R－５１－７

株式会社　ＥＲＣデザイン 構造設計一級建築士証交付番号 第３８６０号 一級建築士登録番号 第２５６３３８号　池田　寛彦	株式会社　岩崎設計事務所	東浦住宅建築工事（第１９工区）	図面番号
	一級建築士登録　第66771号 岩崎　征一	壁式ラーメン構造標準配筋図（９）	縮尺 ― / S-1
	検図 / 製図	設計 H25年2月	愛知県建設部建築局公営住宅課